

No.142  
2003.  
8.8

# 岐阜の博物館

編集兼発行  
〒501-3941 関市小屋名  
(岐阜県百年公園内)  
岐阜県博物館内  
岐阜県博物館協会  
TEL 0575-28-3111  
振替名古屋637909

## 幻の粒子「ニュートリノ」

岐阜県先端科学技術体験センター（サイエンスワールド）館長 飯尾正和



2002年秋、日本中が明るく夢のあるニュースに沸き上がった。東京大学名誉教授の小柴昌俊氏と島津製作所研究者の田中耕一氏のノーベル賞ダブル受賞という日本初の素晴らしい偉業が成遂げられたからである。

小柴先生の生涯をかけた研究の成果が世界的に認められるまでの非常に厳しかった研究生活を少しも感じさせない温厚なお人柄、また、田中さんの夢だにできなかった突然の名誉に喜びと感動と驚きを非常に素直に、そして謙虚に身体全体で表現される姿、お二人とも科学者特有の威厳を振りかざされることなく、心から懇切丁寧に対応される態度が多くの人々に感銘を与えたものと思われる。

概して「最先端科学」は、一般の人々からは難解で、日常生活に関係なく、特別な人達だけの学問と思われ敬遠される傾向にあるがお二人の偉業によって一般の人々に身近なものとして理解されるような風潮が生まれたことは、科学技術創造立国を目指す日本にとっては非常に喜ばしいことである。

特に小柴先生の受賞で有名になった「ニュートリノ」という言葉が一種の流行語のように広く一般に知れ渡ったことは、非常に興味深い。そもそもニュートリノという粒子は全ての物質の究極を追求する素粒子物理学の中でも幻の粒子として世界中の物理学者の最先端研究の対象となっている粒子である。

ニュートリノは素粒子の中で唯一電気を持たない中性でもものすごく小さく、あらゆるものを通り抜けてしまうことから捕らえることが極めて難しい粒子である。太陽からは常時降り注いでいるし、超新星爆発時にも大量のニュートリノが発生する。また、地上の原子

炉からも発生している。

しかし、太陽から地上に届くニュートリノは、1平方cm当たり毎秒660億個というものすごい量であるが、現在の設備レベルで捕えることができるのはわずか10個に過ぎず、まさに幻の粒子といわれる所以である。

現在、ニュートリノの正体がだんだん解明されつつあるが、いまだ質量があるのかどうかの十分な確証は得られてはいない。現在のところ小柴先生で有名になった神岡町のスーパーカミオカンデを使った東京大学の研究と原子核乾板を利用した名古屋大学の丹羽公雄教授の研究が世界の最先端だと言われている。

特に丹羽先生が岐阜県の御嵩町の出身であるので世界中の科学者が注目している研究が我が岐阜県を中心に行われているといっても過言ではないのである。

小柴先生が講演で、ニュートリノの発見で我々の生活は変化するかという質問に対して、「19世紀末頃、電子が発見された当時、同じように生活に何の役に立つのかという議論があった。しかし、20世紀の半ばにはエレクトロニクス産業が我々の生活を一変させた。このニュートリノも今後どのような形で我々の生活に変化をもたらすかは誰も分からないのです。」と述べられている。

ニュートリノは、今は幻の粒子だが、数多くの科学者や技術者の素晴らしい努力によってどのような姿で我々の前に登場するか、大きな期待を抱きながら最先端科学技術がもたらす夢を見続けていきたいと思う。

なお、丹羽先生が世界で最初にタウニュートリノの発見に成功した実験で実際に使用された機器の寄贈を受け、その場に降り注ぐ宇宙線をリアルタイムで画像に映し出したり、小柴先生が実験に使用した光電子増倍管を展示した「ニュートリノコーナー」を本館1階に開設しています。“見えない粒子をつかまえる！”をテーマにいろいろな体験学習ができるようになっておりますので、是非、一度ご覧下さい。

# 第55回岐阜県博物館協会研修会報告

## 資料館の紹介と学校支援事業

日 時：平成15年6月27日（金）午後1時より

会 場：海津町歴史民俗資料館

参加者：12名



### 〔講話の内容〕

海津町歴史民俗資料館の瀬古尹宏氏より、次の順序で学校支援の様子が報告された。

#### 1. 来館する児童生徒への支援

開館してから10年経つが、年平均すると17,000人余りの児童生徒が入館している。特に10月・11月の社会見学者が多い。これは小学4年生の社会科の教科書の中で、「・・・特色のある地域における人々の生活の様子について理解できるように・・・」（学習指導要領）を受けて特色のある地域＝低地として、海津町が取り上げられているからである。それで入館まえに10分～15分間案内をかねて、この地域の様子について説明をしている。また見学のあと希望の学校には、質問の時間をもっている。学校の中には鋤簾や備中鍬を使う体験学習を望まれるのでその要望にこたえている。

また全国から電話や手紙やファックスで質問を受けるが、同じような質問が多いので、Q&A形式の冊子「輪中あれこれ」を発行したと、その冊子を見せていただいた。

#### 2. ふるさと先生としての支援

最近道徳や社会科の授業への参加を求められる事が多い、「・・・自分たちの周りにも、そのようなこと（もの）があるかどうかをしらべてみよう。」ということが教科書などに示されており、それを例示するという役割である。具体的に例を挙げて説明をされた。

#### 3. 輪中巡検隊の実施

今年度で9年目を迎えるが、夏休み中に2

回輪中巡検を実施している。高須輪中とその周辺の史蹟巡りである。町外からも多くの児童生徒が参加している。

#### 4. 能舞台の貸与

文化庁の芸術鑑賞教室などで狂言の鑑賞される学校がある。中学の国語の教科書で狂言を取りあげていることもあって、館の能舞台を利用される。

#### 5. 堀田における体験学習

資料館の前に堀田が設けられている。その田植えや稲刈りを子どもにやらせたいという学校があるので、その要望に応じている。

#### 6. 輪中っ子クラブの活動

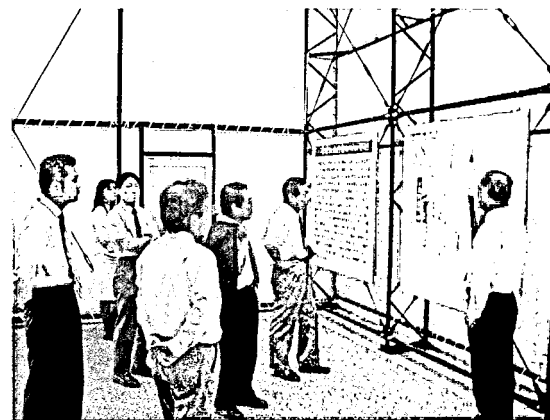
#### 7. 「輪中について考える作文・論文の募集」

#### 8. テレビ会議システム

以上8項目について、具体的で分かりやすい話をお聞きした。

次に30分間ほど各館での課題について話合った。要約すると次の3点があげられた。

- 子どもたちが、なんでも聞いて解決するというのではなく、まず自分で調べるという姿勢を大切にしたい。
- 入場者の数を至上とすることはない。
- 館のスタッフの少なさは、解決できないか。



金廻四間門樋の説明を聞く

続いて館内を案内していただいたが、平成7年に発掘されたという「金廻四間門樋」には、圧倒された。また館内は、明るくて清掃が行き届いていて感心しながら帰路についた。

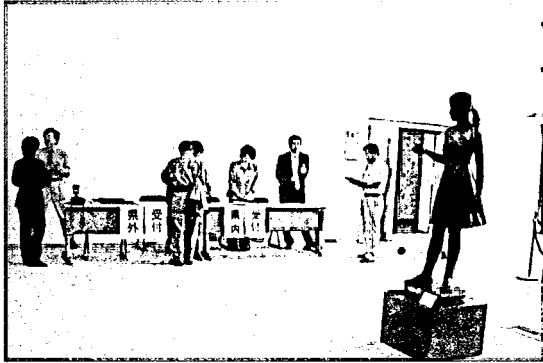
# 平成15年度東海地区博物館連絡協議会

「日本博物館協会東海支部総会に参加して」

日 時：平成15年7月16日（水）

会 場：愛知県芸術文化センター

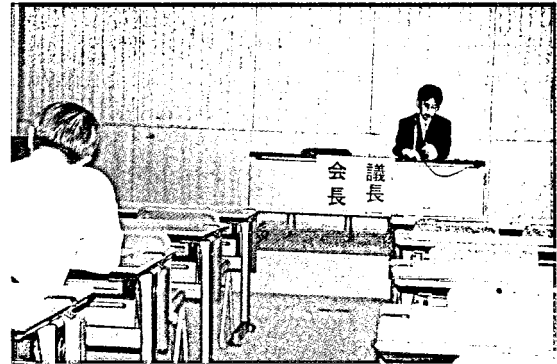
参加県：山梨、静岡、神奈川、愛知、岐阜（72名 岐阜県から16名）



## 〔総 会〕

「この協議会が発足した昭和34年には、加盟館が24館であったのが、本年度は500館余りの加盟となった。・・・生涯学習が叫ばれる時代、博物館や美術館の果たす役割は大きい。」と市川東海地区博物館連絡協議会会長（愛知県美術館長）の挨拶により総会が始まった。来賓の日本博物館協会専務理事五十嵐耕一氏と愛知県生涯学習課長長谷川純一氏から祝辞をいただいた。いずれも「バブル経済崩壊後博物館・美術館の経営が難しくなった、見通しのもてない、厳しい環境に立たされている。・・・望ましい博物館・美術館のあり方を求めてご努力ください。」と述べられた。このあと平成14年度の報告と平成15年度の計画案について円滑に議事が進められた。その他の項の中で、①五十嵐氏から「日本博物館協会の主要事業と最近の動向」について説明がなされた。「博物館の望ましい姿」として「社会貢献を共通の基盤として博物館の多様性を尊重したハードよりソフトを重視する設置・運営の拠りところを構築することにより、各館がその目的や使命に応じた特色を発揮しながら、その存在理由を明確にし社会公共への説明責任を果たし、その支援基盤を広げることにある。」とされ、新しい博物館文化の挑戦として、「集める、伝える」から、「探求する、分かちあう」へ、3つの基本と9つの取り組みについて説明があった。②浜松と各務原の館から、この協議会のあり方について提言があった。「折角このように各地から時間をさいて集まってきてい

るのだから、事務的形式的に会を終えるのではなくて、情報の交換の場としたり、各県に行政的な圧力をかけることができるような存在感のある会にならないだろうか。」というものである。このような時代だからこそ文化的使命と収益性という問題に対し、深い見識をもちたいという意欲が感じられた。このことについては来年度の山梨会場の課題として持ち越された。



## 〔講演会〕

「マスメディアと博物館・美術館」

NHK名古屋放送局アナウンサー

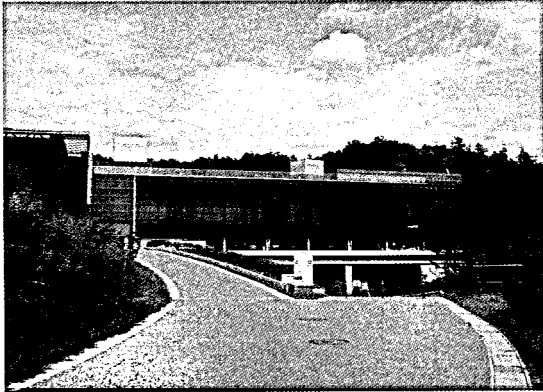
町永 俊雄氏

現今の先の見えない漠然とした世の中で、ミュージアムの再考がなされている。そして展示するだけではなく、評価をしようとする動きも強い。どれだけの収益があったのか、リピーターがいたのか、学芸員の資質も問われている。従来、博物館・美術館は日常的でない傾向があった。海外へいくと足を運ぶが、国内の博物館・美術館へは行くのは大事で億劫になる。結果として入場者は少なくなる。一方日常的であるデパートの展覧会や特色のある小さな美術館には、結構人が入っている。そしてこのような館が増えている。この二つのタイプを融合させようとして「サラサラ ミュージアム」という番組を始めた。単なる展示の案内ではなく、学芸員の推奨する一作品を中心に音楽を交えて紹介をしていく番組である。すでに放送をされた作品を映して具体的に話を進められた。大変面白く、魅力のある内容であった。

（機関紙委員海津町歴史民俗資料館 瀬古尹宏）

## 岐阜県現代陶芸美術館

〒507-0801 多治見市東町4-2-5  
TEL:0572-28-3100 FAX:0572-28-3101  
URL <http://www.blk.mmtr.or.jp/cp-mino/>

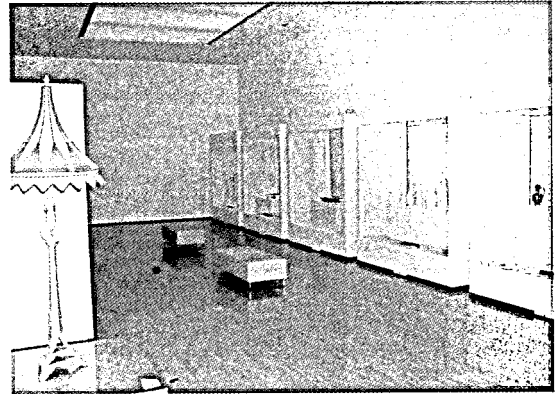


土岐市境に位置する多治見市東町に現代陶芸をテーマとした美術館が平成14年10月にオープンしました。総敷地面積が17ヘクタールという広大な土地に地上3階・地下1階建ての建物が建っています。ちなみにこの広さは名古屋ドームの約2.5倍の広さにあたります。2F・3Fが美術館になっており、美術館を除くその他の部分には大展示ホールや国際会議場をはじめ、レストランや茶室、作陶館などのアミューズメント施設、さらには散策路や展望台などがあり、これらを総称してセラミックパークMINOと呼んでいます。建物の設計は、世界的に著名な建築家磯崎新氏によるもので、自然環境との調和に配慮した施設になっています。

美術館が位置する東濃地域は古くから美濃焼の主産地として知られ、いくつかの資料館や博物館があることから、美濃焼だけでなく世界各地の近現代の陶芸作品を扱いこの美術館の独自性をだしています。

収蔵作品は、現代陶芸をテーマとして、収集対象を国内外の近現代（19世紀末以降）に絞り以下の3つの点を主眼としています。①19世紀末から20世紀以降における、国内外の個人作家の陶芸作品（荒川豊蔵・富本憲吉など）②作家が実生活に用いるためのものとして、あくまで手作りによって制作した、少量生産

の陶磁器③アール・ヌーボーやアール・デコあるいはバウハウスといったモダンデザインの系譜のもの、またマイセンやセーブルといった世界の名窯など、量産を想定しながらデザイン性や芸術性を追求する陶磁器。



展示室は大きく二つに分けられ展示室Ⅰでは現在「ロシア・アヴァンギャルドの陶芸」展が行われています。ロシア革命前後に起こったロシア・アヴァンギャルド芸術の中から、陶磁器に焦点を絞り、20世紀初頭の国立陶磁工場を拠点に活躍した作家の作品から約200点を厳選して展示しています。

展示室Ⅱでは三つのコンセプトで①世界の名窯としてマイセンやセーブルなどのブランド陶磁器、②収蔵品のうち日本人作家のオブジェ、③美濃の人間国宝をはじめとして、岐阜の陶芸史の骨格を形成する作品などを展示しています。

また、美術館の入口横には美術館収蔵作家の作品や展示物に関連した参考書籍などを販売するミュージアムショップや展示作品のデータなどが閲覧できるデジタルライブラリーが併設されています。

【交通】JR中央線多治見駅から

「妻木上郷・妻木神宮」行きバス乗車、「下沢橋」下車徒歩10分

【駐車場】312台（無料）

【開館時間】午前10時～午後6時

（入館は5時30分まで）

【休館日】月曜日

（月曜日が休日の場合は翌日）

【入館料】一般320円 大学生210円

幼児、小・中・高校生は無料

（機関紙委員土岐市埋蔵文化財センター中島茂）